

哲學研究

第三百六十二號

第三十一卷
第五冊

民族發達の諸段階

白井 二尚

(一)

民族とは何であるかに就いては嘗て私見を本誌に載せた(白井、民族の諸規定「哲學研究」第三百二十八號)。併しながら爾來既にかかりの歲月が経過した若干年以前の事に屬するが故に、今茲にまた民族に關して論ぜんとするに當つては、この複雑にして異論多き民族の概念を本稿は如何なる意味に用ひるかを略述する事が必要であらう。揆て、民族が人間集團なる事は何人も認容するところであらうが、いま茲では民族集團は生のあらゆる領域に於いて、外に對して特殊なる文化を内に共通にする集團であると規定したい。特殊なる文化があらゆる領域に互つて成立し更に共通になるには、通常長い年月を要し、長い年月を経る文化は傳統的文化であるが故に民族はあ

らゆる領域に於ける特殊傳統文化を共同にする人間の集團と言ふことが出来るであらう。これ即ちドイツの民族論が約言して文化共同體(Kulturgemeinschaft)と呼ぶものに外ならず、民族を以つて文化共同體となす事は、民族理論に於ける客觀説の立場をとるに外ならない事も、敢へて言ふを要せざる所である。而して客觀説に對して主觀説の存在することも周知の如くである。主觀説は民族を以つて共屬(Zusammengehörigkeit)の意識及び意欲を共同にする人間の集團なる主觀的結合體なりとするのであるが、これに對しては、民族的共屬を意識し又意欲するは抑も如何なる人間であるかが、直ちに問題とならざるを得ない。共屬の意識及び意欲は共通なるもの存在するところには此のものの共同を基礎として成立する

が、文化共同體を基礎とせざる共屬は民族的共屬とは言はれない。特殊文化領域例へば宗教の領域に於て特定宗教上の教義を共通にする人間が共屬を意識し又意欲しても、それは同一宗教を奉じ又は同一宗教に屬する者としての共屬に過ぎず、彼等の間に於ける文化的特殊性の共同がなければ、こゝには異民族の宗教的共屬が見られるのみである。共屬はまた運命の共同 (Schicksalsgemeinschaft) を基として成立し、又運命の共同の保持となつて現はれる。併しながら運命を共同にする人間が文化共同體を成さざる限り、此處に見られるのは異民族の運命共同に過ぎない。運命の共同と結合せる共屬の意識及び意欲の純粹にして、鞏固なる一例はスイスに見られる。併しながらスイス人が國民としての Nation を成す事は何人も認めると同時にスイス人が民族としての Nation を成すことを認める人は尠い。これスイスが多民族國家の適例として常に挙げられる所以である。運命の共同體が民族たり得るのは、それが同時に文化共同體なる限りに於てである。民族の主觀的結合の根柢に客觀的文化共同體の存するのは、主觀説を執る人々に共屬の意識及び意欲の基礎として文化共同體を擧げる者の多い事によつて明らかである。例へば主觀的論者ヘルツの如

きも、社會學的に大切なることは、主觀的な感情共同體は必ず客觀的な所與例へば言語・文化・國家・社會・經濟・歴史の如き最も力強い根源を有するといふ事であると言ふ (F. Hertz: Zur Soziologie der Nationen und des Nationalbewusstseins, Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik 六五卷、一九三一年、七頁)。茲に揚げられた民族的共屬の諸々の根源が文化なる語によりて總括され得ることは言ふを俟たざるところであらう。斯くて主觀説を執る者も同時に客觀説を併せてゐる場合が少くないのである。例へばジョセフが民族の眞實の精髓にして根本的なる基底はその成員の大多數に永續的に現存し明確な統一の意識を與へる主觀的團體感情 (subjektive gemeinsame sentiment) であるとすると共に、民族は客觀的には郷國 (homeland)・言語・宗教・歴史・文化又は傳統の如きそれに特有で客觀的に構成された一定の集團的屬性をも有することによつて、他から區別された集團であるとしてゐる (B. Joseph: Nationality, Its Nature and Problems 一九二九年、三〇八ト九、三五二頁) が如きはその一例である。民族の主觀的結合が時の昂奮や感情にすぎざるものによる限り、それは儘くまで傳統的文化共同體に根ざせるものでなくてはならない。一定の人間の民族

的所屬が主觀的な意識や意欲によつて決せられ又は表示されると見られるのは、その人間が幾つもの文化共同體に部分的に參與し、その參與の度も大差なき場合に過ぎない。文化共同體と共屬の意識及び意欲の結合は「祖國」〔祖地〕(Vaterland)の觀念に於いて明瞭に現はれてゐる。民族的文化は傳統的文化であり父祖傳來の文化である。而して又文化共同體は必ず一定の地域に於いて成立し、その土域と結合してゐる。此の地域は其處に於いて傳統的文化を父祖が育み保つて來た地域なるが故に祖國祖地と呼ばれる。他方民族的共屬の意識及び意欲が昂揚する時、それは共屬する民族成員の占居する地域の維持擁護に向ふは自然であり、斯く地域に向けられた民族的統合の感情意欲は、通常愛國心なる言葉を以つて呼ばれる。愛國心の究明に力を盡したミヘルスやウエスターマートの論述に於いて祖國愛と民族意識とは同一視され、此等の二語は何等の區別もなく用ひられてゐる。愛國心の對象たる國は父祖以來の民族的傳統文化共同體の存続し來れる所なる祖國に外ならない。これ即ち愛國心が祖國愛 (Vaterlandsliebe) なる言葉を以つて呼ばれたる所以である。斯くの如く民族的共屬の意識及び意欲の向ふ地域的對象が傳統的民族文化の及ぶ地域なる事によつて

民族發達の諸段階

も、民族的共屬の意識及び意欲が文化共同體を基礎とするものなる事は明らかであらう。

以上によつて民族の主觀的結合は客觀的文化共同體を基礎とするを正常態とする事が明かになつたのであらうが、併し後者のあるところ必ずしも前者があるとは言はれない。此の事は、民族的共屬の意識及び意欲の明確なる發現形態たる民族主義が近世に胚胎し、長き年月の後に十九世紀に於て漸く成熟せる一事によつても表示される。これ、民族を、文化共同體を成しながら共屬の意識及び意欲を缺如するものと之を具有するものとに分ち、後者を特に近代民族と呼ばんとする人や、また主觀說に徹底して民族は共屬の意識及び意欲の明確に現はれた十九世紀のものなりとする人等のある所以である。通俗的なる概念規定は民族を以つて人種共同體なりとする場合が多く、又此の大種說が、茲處のドイツ學界に於いて支配的勢力を有する事は改めて指示するを要せざるところであるが、一般學界が人種と民族との一致せざる事を認めることに於いて一致して居る事も亦周知の事に屬する。茲に見られる見解の差異は、人種概念の混亂に基づくところがある。等しく人種と言ふも、例へばヨーロッパ人種とそれの一部に過ぎざる北方人種又これらの一部に過

ぎざるチネートン人種等の間には、明かに段階の差異があり、一の段階に就いて言へる事は、必ずしも他の段階には妥當しない。包括的なる高次の人種相互間の體質的及び文化的差異は、同化によつて消失し難いに對し、小なる低次の人種間の此等の差異は同化によつて消失し易い。従つて、高次の人種への所屬に於いて相異する人々が同一文化共同體を成すことは難く、その上斯かる人々の間には、更に體質上の差異による共屬の意識及び意欲の阻害があるが故に、高次の人種の差異は即ち民族的差異と合致する。之に反して低次の人種への所屬を異にする人々の間に存する體質上の差は顯著ならざるが故に、それは文化を等しくすれば認知され難く、他方斯かる人々は僅かの世代を重ねれば同一文化共同體を成し易く、體質も亦類似するが故に、主觀的結合の阻害もなく、單一民族を形成し易い。従つて低次の人種の異同は民族的異同とは合致しないのである。民族は高次の一人種への共屬を必要とするが、高次の一人種に共屬する人間が相寄つて單一の民族を形成する事はなく、包括的なる高次の人種に共屬する人間は分れて多數の民族を形成してゐる。斯くて高次の人種への共屬は未だ直接民族を基礎づけるものではなく、それは民族的共屬の必要條件ではあ

るが十分なる條件ではない。他方低次の人種への共屬は民族的共屬の必要なる條件でも十分なる條件でもないと言はれ得る。併しながら、血を等しくする事は場所を共にし文化を等しくする事の頗る有力なる一因をなすが爲に、文化の共同の存する所には血の共同があると考へられ易く、斯くて民族は人種共同體なりと信ぜられ易い。斯くて古來人種的共屬の信念は殆んどあらゆる民族に存在し、同祖同血の信仰は民族の主觀的結合を支持強化する一の有力なる紐帶をなして居る事は否まれぬ。

民族的共屬の意識及び意欲は同一の高次人種への共屬によつて著しい體質の差異を認めしめざることを條件とし、文化共同體を基礎として成立するのであるが、此等の條件及び基礎が備はつても、未だそれが直ちに成立するとは限らない。共屬の意識は共屬せざるものから共屬するものを意識的に分つ事によつて可能となるが、凡そ区分は比較を前提とし、比較は比較されるものが、一方に於いて相互に異なると共に、他方に於いて共通なる普遍者を共に分有し乃至は之に共に參與することを前提とする。共通なる普遍者に包括される事なきものは、乖離の關係に立ち比較を絶する事は改めて言ふを要しない。故に自民族と他民族とを區別する事は、諸民族を包括す

る高次の社會集團としての人類社會が存在し、これに就いて人が意識する事を前提とし、斯かる人類社會を基盤として、等しくこれに屬しつゝ相互に異なる集團としての民族が區別され得るのである。而して斯かる包括的な人類社會の成立し得る爲には、民族間の接觸交渉によつて文化の交渉が行はれ、異民族間の領解も或程度まで可能となつて、異民族以外の人間にも人間としての共通性のあることが悟られる事を必要とする。斯くて始めて自他の民族集團が人間としては同一普遍者に下屬しつゝ、民族としては異なる特殊者として相互に區別され得べき基盤が成立するのである。此の人類社會の基盤として、自民族に特有なる文化が何であり、これを共同にするは如何なる人々なるかを反省意識する時、これを共同にする人々に對する民族的共屬の意識が現はれると共に、共屬する民族成員が特有文化の擁護伸展乃至所屬民族集團の發展の爲に共屬を維持し協力せんとする意欲が成立するのである。民族的共屬の意識及び意欲の覺醒に導く民族的反省の生ずる以前には、人は即自的 (Eg. self) に民族成員たるにとまり、從つて文化共同體は存在しても、主觀的結合は成立しないのである。

民族の主觀的構成要素としての共屬意識及び意欲を覺

民族發達の諸段階

醒せしめる反省 (Reflection) は、即自的なる民族共屬が否定を受ける時、之を媒介として初めて生ずる。此の否定を興へる因素は種々あるが、その主なるものは、他民族との接觸交渉及び他民族との對立反對の關係である。前者は人及び物の地域的移動が民族の占居する地域、即ちその祖國の境界を越えて行はれる度に對應する。即ち他民族の人及び物がその民族独自の文化を携へて自民族の集團中に入り込む場合にも、この外來文化はその特異性の故に自民族の傳統的文化と直ちに合致調和し難く、從つて傳統的民族文化に従ふ生活に改變限定を迫ると言ふ一種の否定を加へるのである。併しながら人が自民族集團から出て他民族の中に赴く時には、其處には自民族特有の文化は一切缺如するが故に、自民族の文化共同體への參與は全面的に否定され、從つて民族的反省も亦全面的になり、且明確にならざるを得ない。民族所屬の即自態を否定する他の主要因素は他民族との對立反對の關係であるが、その著しいものは他民族との鬭争及び他民族による抑壓である。鬭争によつて民族の存立が脅かされるといふ否定を媒介として、人は今や危殆に陥れる民族の基底をなす文化共同體が如何なるものであり、此の文化共同體に參與する事によつて人と成り、此の民族文

化を以て自己の生の本質を形成する自己が、民族に根ざし之に依存すること如何に深きかを反省意識するに至ると共に、共に同一民族に屬する民族成員の共屬の意識が明確且熾烈なるのである。同一の事は抑壓に於いても亦認められるが故に、抑壓は民族意識の發展と即自的民族が自覺民族に成る爲の必要な刺戟を提供する過程とに於ける顯著な因素の一であると言はれるのである (Joshi, 三〇九頁)。

以上によつて民族を成すは客觀的なる文化共同體であり、主觀的なる共屬の意識及び意欲は、この文化共同體を基盤として成立し得る事、併してこの意識及び意欲の覺醒は文化共同體のある所未だ必しも生起せず、なほ諸他の條件の備はるを俟つものなる事を略述した。併しなから一切の文化が外に對して特殊性を有すると共に内部の全成員に共通なるが如き民族は理想型 (Idealtypus) に過ぎず、現實には存在しない事は言ふをまたない。ただ現實集團が此の理想型に配與すること大に、此の理想型を實現するに近き處に従つて、その集團の民族性の度が高いに過ぎない。此の民族性の度が低くければ、現實の民族的共屬の意識及び意欲はそれの他の規定因素が如何にあらうとも、成立し難く、又は明確になり難いのは

當然である。但し民族成員が諸文化に對して抱く尊重定着は一様ではなく、文化領域の差に従つて種々相異なる。従つて民族成員の特に尊重し定着する文化が文化共同體の内容として實現される事大なる民族に於いては、他の領域の文化には内に共同にして外に特殊なるものが少くとも、共屬の意識及び意欲は比較的に明確且旺盛になり得るであらう。斯くて歴史的なる個々の民族集團が如何なる度並に於いて民族であり、乃至は民族として如何なる段階に位するかは、それぞれ民族の文化共同體が現實に如何にあるか、即ち夫々の民族はそれに特有なる文化を如何なる程度に有し、同時に又その文化が民族成員に如何に共通であるかに根本的に依存することになる。而して夫々の民族の文化の外に對する特殊性は、主として夫々の民族が外部との接觸連關を如何に限定されるかによつて規定され、又夫々民族の文化の内に於ける共同性は、内部成員が地域的及び階層的に如何に區劃され、斯く區劃された成員相互の接觸聯關が如何に限定されるかによつて規定される。故に此等地域的階層的規定なる民族の構造を觀點として、民族の歴史的消長を辿る事によつて、やがて歴史的民族の現實態に於ける民族性そのものの消長が明らかにされ得るであらう。

る高次の社會集團としての人類社會が存在し、これに就いて人が意識する事を前提とし、斯かる人類社會を基盤として、等しくこれに屬しつゝ相互に異なる集團としての民族が區別され得るのである。而して斯かる包括的な人類社會の成立し得る爲には、民族間の接觸交渉によつて文化の交渉が行はれ、異民族間の領解も或程度まで可能となつて、異民族以外の人間にも人間としての共通性のあることが悟られる事を必要とする。斯くて始めて自他の民族集團が人間としては同一普遍者に下屬しつゝ、民族としては異なる特殊者として相互に區別され得べき基盤が成立するのである。此の人類社會の基盤として、自民族に特有なる文化が何であり、これを共同にするは如何なる人々なるかを反省意識する時、これを共同にする人々に對する民族的共屬の意識が現はれると共に、共屬する民族成員が特有文化の擁護伸展乃至所屬民族集團の發展の爲に共屬を維持し協力せんとする意欲が成立するのである。民族的共屬の意識及び意欲の覺醒に導く民族的反省の生ずる以前には、人は即自的 (Egocentric) に民族成員たるにとゞまり、從つて文化共同體は存在しても、主觀的結合は成立しないのである。

民族の主觀的構成要素としての共屬意識及び意欲を覺

民族發達の諸段階

醒せしめる反省 (Reflection) は、即自的なる民族共屬が否定を受ける時、之を媒介として初めて生ずる。此の否定を興へる因素は種々あるが、その主なるものは、他民族との接觸交渉及び他民族との對立反對の關係である。前者は人及び物の地域的移動が民族の占居する地域即ちその祖國の境界を越えて行はれる度に對應する。即ち他民族の人及び物がその民族独自の文化を携へて自民族の集團中に入り込む場合にも、この外來文化はその特異性の故に自民族の傳統的文化と直ちに合致調和し難く、從つて傳統的民族文化に従ふ生活に改變限定を迫ると言ふ一種の否定を加へるのである。併しながら人が自民族集團から出て他民族の中に赴く時には、其處には自民族特有の文化は一切缺如するが故に、自民族の文化共同體への參與は全面的に否定され、從つて民族的反省も亦全面的になり、且明確にならざるを得ない。民族所屬の即自態を否定する他の主要因素は他民族との對立反對の關係であるが、その著しいものは他民族との鬭争及び他民族による抑壓である。鬭争によつて民族の存立が脅かされるといふ否定を媒介として、人は今や危殆に陥れる民族の基底をなす文化共同體が如何なるものであり、此の文化共同體に參與する事によつて人と成り、此の民族文

化を以て自己の生の本質を形成する自己が、民族に根ざし之に依存すること如何に深きかを反省意識するに至ると共に、共に同一民族に屬する民族成員の共屬の意識が明確且熾烈なるのである。同一の事は抑壓に於いても亦認められるが故に、抑壓は民族意識の發展と即自的民族が自覺民族に成る爲の必要な刺戟を提供する過程とに於ける顯著な因素の一であると言はれるのである (Osaka, 前掲書、三〇九頁)。

以上によつて民族を成すは客觀的なる文化共同體であり、主觀的なる共屬の意識及び意欲は、この文化共同體を基盤として成立し得る事、併してこの意識及び意欲の覺醒は文化共同體のある所未だ必しも生起せず、なほ諸他の條件の備はるを俟つものなる事を略述した。併しながら一切の文化が外に對して特殊性を有すると共に内部の全成員に共通なるが如き民族は理想型 (Idealtypus) に過ぎず、現實には存在しない事は言ふをまたない。ただ現實集團が此の理念型に配與すること大に、此の理念型を實現するに近き處に従つて、その集團の民族性の度が高いに過ぎない。此の民族性の度が低くければ、現實の民族的共屬の意識及び意欲はそれ他の規定因素が如何にあらうとも、成立し難く、又は明確になり難いのは

當然である。但し民族成員が諸文化に對して抱く尊重定着は一種ではなく、文化領域の差に従つて種々相異なる。従つて民族成員の特に尊重し定着する文化が文化共同體の内容として實現される事大なる民族に於いては、他の領域の文化には内に共同にして外に特殊なるものが少くとも、共屬の意識及び意欲は比較的に明確且旺盛になり得るであらう。斯くて歴史的なる個々の民族集團が如何なる度並に於いて民族であり、乃至は民族として如何なる段階に位するかは、それぞれ民族の文化共同體が現實に如何にあるか、即ち夫々の民族はそれに特有なる文化を如何なる程度に有し、同時に又その文化が民族成員に如何に共通であるかに根本的に依存することになる。而して夫々の民族の文化の外に對する特殊性は、主として夫々の民族が外部との接觸連關を如何に限定されるかによつて規定され、又夫々民族の文化の内に於ける共同性は、内部成員が地域的及び階層的に如何に區劃され、斯く區劃された成員相互の接觸聯關が如何に限定されるかによつて規定される。故に此等地域的階層的規定なる民族の構造を觀點として、民族の歴史的消長を辿る事によつて、やがて歴史的民族の現實態に於ける民族性そのものの消長が明らかにされ得るであらう。

[1]

原始社會に於いては、通常複数の部族が相寄つて民族をなすとされる。而して部族はまたより小なる幾つかの地域群 (Local Group) より成る。一般に原始社會に於ては社會の階層的な差異と隔離は僅少であるが故に、各集團の外に對して特殊なる文化は、内に於ては階層的な上下の別なく共通なるを常とするが、地域的には社會の未開性の故に人及び物の移動が制約される事著しく、部族が高度の封鎖性を有して、部族相互の間の接觸交渉が乏しいが故に、夫々の部族に外に對しては特殊にして内に於ては共通なる文化が多く、従つて諸部族を包括する高次の集團としての民族の内部全般に共通なる文化は少く、故にまた民族外に對して特殊なる文化も少なからざるを得ない。若しも相寄つて一民族を成す諸部族の夫々の外に特殊にして内に共通なる文化が、民族の外に特殊にして内に共通なる文化よりも多い場合には、各部族の成員の共同にする結合意識も亦、民族成員に共同なる結合意識よりも、強く且つ明確であらう。従つて斯かる場合にはむしろ部族が民族性に於て民族よりも優るとも言ふことが出来るであらう。往々にして部族が民族と呼ばれるのも故なき事ではない。バヂョトは部族が民族なり

し時なる言ひ (W. Bagehot: *Physics and Politics* 七頁)、ヘイズも亦、多くの古代の著作家と同様に部族を呼ぶに民族なる言葉を以てせんとする (C. Hayes: *The Historical Evolution of Modern Nationalism* 一九三一年、一頁)。民族的文化が部族的文化を凌駕してゐる場合にも、一般に地域的移動の容易ならぬ未開人は、周囲の他部族と接觸交渉する機會はあつても、同一民族に屬しつゝも遠隔の地にある他部族と接觸交渉する機會に乏しく、更に所屬民族の外部に居る事によつて、民族文化共同體を反省意識する機會にも乏しいが故に、部族的文化共同體を基礎とする同一部族の成員間の共屬の意識及び意欲はあつても、民族的共屬の意識及び意欲の缺如する場合は多い。斯かる場合に若しも各部族の封鎖性が太ならば、各部族内部の文化の共通性従つて内部的等質性は高まると共に、他部族との間の律かの文化的差異も極めて鋭く感ぜられ易いが故に、同一民族に所屬する部族には共屬の意識及び意欲が成立し難いのみならず、却つて分離反對の意識及び意欲が生起し易い。故に原始社會に於ては文化共同體と共屬の意識及び意欲とが合致し難く、前者は諸部族を包括し廣汎なる地域に互るに對し、後者はより狭小なる部族に集中する場合が多いのである。

いまアメリカン・インディアンに就いて見るに、彼等は一定の地域に部族集團を成して生活し、整一的な生活様態を遵守して、標準化する行動の仕方に服してゐる (C. Wissler: An Introduction to Social Anthropology, 一九二九年、一五、二五頁)。而して斯く部族の内に共通なる文化は外に對してはまた特殊性を有する。故に一般的に言へば、彼等を對象とする文化人類學に於て用ひられる最も小なる文化集團は部族であり、多くの場合部族文化が相互に區別され明確に定限 (delimit) される。斯くの如く部族は高度に發達せる文化共同體を形成すると同時に、各部族の成員は自己が屬する部族のあらゆる成員を知り、部族仲間と然らざる者とを一目で識別する (右同書、二四頁)。右の如くに部族的共屬の意識の明確なるところに「部族的愛國心」(tribal patriotism) の強いのも自然であり、ウェスターマークの如きも、北米インディアンはその部族とその國 (country) への強い愛着の故に、眞の愛國的精神ありとして賞讃される事を指示してゐる (E. Westermarck: The Origin and Development of the Moral Ideas 第二卷、一九二二年、一六七頁)。併しながら彼等の一部族の文化は隣接部族のそれに類似する傾向があり、文化特質の或ものを經ての直接隣り合ふ諸部族と共有せ

ざる部族は殆んど見出されたり (W. D. Wallis: An Introduction to Anthropology, 一九二六年、四五四頁)。而して同様なる文化特質の多數部族にまたがる分布は、生活のあらゆる部族に於いて見出され、しかも重要な特質にして斯く共通なるものは多數存在する (Wallis 前掲書、三一四、三一六頁)、故に文化に於ける類似性によつて統一體を呈示する部族の集團が存在し、その占居する地域が文化地域 (culture area) と呼ばれる (右同書、三五五頁)。此の文化地域に共通なる文化複合體は或程度まで關係諸部族の共同の所産であり、人類學者は部族文化は單一部族のみの所産ではなく、諸部族に互る地域に於ける文化發達の一單位であると考へて居る (右同書、三二五頁)。斯かる諸部族を包括する高次の文化的統一體は即ち民族と呼ぶべきものであらうが、同一文化地域内にある諸部族内の接觸交渉は頻繁ではなく、屢々、諸部族が政治的連絡をなすことはあつても、その場合にも各部族は多く獨立的に働く (右同書、二六頁)。従つてインディアンは超部族的な共屬の意識及び意欲を有たず、文化地域とそれに共通にしてその外には奪せざる文化が如何なるものであるかは、彼等の闕知せざるところであり、之を明らかにせんとすれば學者の探究に俟たねばならぬ有様である。し

かも多數に存在する斯かる文化地域の總てに共通にして此等の外に對しては特殊なる文化特質も亦存在する。これ即ちアメリカン・インディアン全部に共通なる文化であり、此の文化を内容とし諸文化地域を包括する文化共同體を基礎として一つの高次の民族が考へられる。通常此の高次の民族が民族として觀念され、アメリカン・インディアンなる名稱が之に與へられてゐるのである。しかもこの民族の成員は體質を等しくする點に於いて人種共同體でもある。併しながら此の民族が民族として把握されるのは、外部の異民族によつてであつて、インディアン自身には此の民族は何等意識に上らず、此の民族の古居する地域を祖國とし、之に對する愛國心に依つて結束するが如き事は全く認められない。即ち彼等にあつては民族の主觀的統一性は何等存在しないのである。以上によつて明かなる如く、アメリカン・インディアンにあつては、その文化共同體は大別して人種共同體と合致するもの、文化地域及び部族の三段に分たれ、其の意識及び意欲は主として部族に集中して、他には缺如するのである。斯くて此等三段の集團はその各々が或る程度まで民族性を有すると共に、夫々の集團の具有する民族性は、此等三段に分たれる文化特質が一集團に集積して之に

非屬の意識及び意欲も結合する場合に比して、遙かに稀薄であると言はなければならぬ。

アメリカン・インディアンに於て認められた事は、オーストラリア原住民に於いても亦認められる。オーストラリア原住民の部族も亦一定の地域に古居し、實際の又は表向きの同祖關係を有するが、他方階層的區別は有しない。而して各部族は言語・宗教・慣習・政治・經濟等を共有すると共に、それ等は或程度まで隣接部族のそれと相異なる。他方彼等は自己の部族を誇る部族感情を有し、他部族の言語・慣習等を蔑視する風がある。又各部族は別々の名稱を有し、部族員は其屬の意識を有する (A. P. Elkin: *The Australian Aborigines* 一九三八年、二三、三二、八五頁)。部族の地域は一般に土人の鄉國 (Home) であり、彼等は此の中では寛ぎを感じると共にその外は彼等にとつて未知であり、従つて自己の土地の外に居る事は彼等の希はざるところである (右同書、四二、二六頁)。右の如き諸點に於いて、部族は明らかに民族としての特質を備へる事が多いと言はなければならぬ。併しながら部族内の文化的差異は打ち勝ち難きものではない。例へばあらゆる原住民は二つの言語を聴き又は理解することが出来る。斯くて諸部族には或程度まで言語・宗教・

政治・制度等の諸々の文化の共通性がある。とは言へ、此等諸部族に共通な感情は存在せず、此等諸部族の成員に彼等が特別な仕方では結合されてゐるとの意識があるか否かも疑はしい。故に斯くの如き諸部族を包括する文化共同體は、或度の特殊文化の共通性にも拘らず、民族とは言はれないとされるのである（右同書、二七一—三八頁）。しかもまたオーストラリア全土に散在する斯かる諸部族に共通なる文化も亦尠くない。即ち此等部族の言語は同一語族に屬し、親族制度、宗教的禮拜その他の文化も亦共通性を有する。又全オーストラリア土着民は略々血統及び體質を一にすると見られる人種共同體をなしてゐるが、前述の如く部族にのみ特有なる文化の多いが故に、包括的なる高次の集團の文化共同體は内容に乏しく、又共屬の意識及び意欲も缺如する。従つて全オーストラリア土人を包括する集團は假令人種共同體をなしてゐても、その民族性は稀薄であると言はなければならぬ。

アメリカン・インディアンに於ても屢々部族の内部に幾らかの小文化集團が存在する場合がある（Wallis 前掲書、四五—四頁）。併しながら斯かる小集團に特有なる文化は多くはないが故に、前述の如く通常部族が最少の文化集團として扱はれるのであるが、オーストラリア原住民に

あつても部族は幾つかの小地域集團即ち群族 (horde) に分れ、各群族も言語・宗教・慣習・政治等を等しくし、食物の蒐集から戦争まで殆んど一切の生活を共同にする。各群集の占居する地域は現地研究者によつて國 (community) と呼ばれ、此の地域が彼等土人によつては郷國 (hometown) とあるとも説かれてゐる (Hill 前掲書、四〇、四二頁)。事によつても知られる如く、群族も亦或度まで文化共同體をなし民族の特質を有するのであるが、諸群族はトーテムリズムやクラン制度等によつて、相互に交渉連關する事多きが故に、諸群族を包括する部族の文化的共同及び主觀的共屬が大であり、従つてまた部族の民族性が群族のそれよりも發達してゐるのである。

更に南洋の原住民に於いても同様の事が認められる。例へばニューギニアのポート・モレスビーに近いパプア灣の東岸 Cape Possession から Purari Delta までの地帯の住民は、人種上質的であつて、パプア人に屬し (Fr. E. Williams: Drama of Arokole 一九四〇年、二一—三頁)、明かに單一種族集團を構成してゐる。同時にまた彼等は言語・親族制度・祭儀・經濟・慣習その他多くの點に於いて共通性を有すると共に、周圍の住民とは體質及び文化を異にし、直ちに區別され得る（右同書、二三—六頁）。

即ち彼等は明らかに一つの人種並びに文化の共同體を成してゐるが故に、一つの民族と呼ばれ得べきであるが、併しなから彼等には一體の意識 (sense of unity) が足りないため、全部に通ずる名稱に自ら思ひ到る事なく、従つて彼等を *Miona* 或ひは *Ipi* と呼ぶは、何れも彼等と交易し又は彼等を研究調査する外部の者が、彼等を總括して扱ふ必要上適宜に選んだ名稱に過ぎない (右同書、二三四頁)。他方諸部族は上述の一般的特質性の内部に於いて種々差異を有し、斯かる差異に就て記さんとすれば、全く混亂せるものではないとしても頗る滑澁なる書物を書くことになるであらうとさへ言はれる。部族は幾つかの村落に分れて居るが、同一部族に屬する村落はヨーロッパの影響を蒙る以前には、言語その他一切の點に於いて同一文化に屬して居た (右同書、二六一九頁)。これによつて部族の文化共同體が高度に發達して居り、共屬の意識も之に集中してその外に及び難い事が察知される。更に社會の階層的規定を一瞥すれば、彼等の社會は著しく民主的であつて、總ての人間が實質上平等であり何等定まつた支配の組織なく、富と地位との差が認められるとは言へ、此等は胚芽的段階を出でず、社會層は存在しないとも言はれ得べき程度に止まつてゐる (右同

書、八四頁)。従つて客觀的文化の共同及び主觀的共屬が階層的區割分離される事は全くないのである。

未開人もその文化が進み人及び物の地域的移動が容易なるにつれて、諸部族に共通なる文化が多くなり、又斯くて發達する超部族的文化共同體に屬する諸部族間には、共通なる外敵との抗争の反覆する事によつて、共屬の意識及び意欲を明かにし、やがて諸部族を包括する高次の統一體としての民族が、その實在性を濃厚にするに至る。ゲルマン人もタキツスの時代には、部族は血の純粹性に注意し、神格ある同一祖先から出たものなることを歌ふと共に、諸部族は相互に殺伐な憎惡を抱き合つてゐたのであつた (cf. Hertz: *Wesen und Werden der Nation*, (Salomon 篇 *Nation und Nationalität* 一九二〇年、三九頁)。諸部族を包括する高次の集團はなほ未だ民族性に乏しかつたが、その後ロオマ人と接觸し之と鬭争を重ねるにつれて、茲に生ずる否定に媒介された共屬の意識及び意欲により、紀元第三世紀の頃から合同し初め、所謂暗黒時代の初期には種々の大團結を成した。斯かる諸部族の聯合が次第に鞏固になり、やがて民族移動時代に名を残した諸民族が形成されたのであつた。現代のペドゥイン人の如きも、人種及び言語その他の文化の同一性は社會的

及び政治的單位集團の外に及ぶと共に、自己の部族のみならず他の總ての部族の利害をも顧慮し、全般的な團體精神を表す事屢々である。又、トンガン人の如きも自己の島のみならず、總てのトンガンの島々を一つの言語ある一つの國として愛すと言はれるが (Westermann 前掲書、一七〇頁)、斯かるところには何れも超部族的な文化共同體及び共屬の意識及び意欲が發達して居り、従つて諸部族を包括する集團としての民族の實在性の發達せる段階が呈示されて居るのである。以上によつて明かなる如く、未開人の共屬の意識及び意欲は主として部族に限られ、超部族的なる高次の文化共同體に及びもの少きのみならず、此の主觀的共屬はまた多くの場合即自態に止まり眞の自覺には達しない。これ彼等の文化低くその生活が地域的に開かれざるが爲に、地域的移動が容易ならず、所屬文化共同體の外に居る事によつて、他の文化共同體を領解すると共に、所屬文化共同體を反省する機會の乏しい事情よりする當然の歸結である。彼等の多くは諸部族を包括する高次の文化共同體に共屬の意識を及ぼし得る程度に至るまで、部族外との接觸交渉さへ營まざる状態にあるが故に、右の高次の民族的文化共同體の地域外に出るが如き事は殆んどなく、従つて斯かる未開人

は共屬の意識の及ぶ低次の小下屬集團を知るのみでその他を知らない。故に彼等は所屬集團の外に之と同等にして別異なる諸集團が存在し、此等が所屬集團と共に相寄つて高次の統一體をなす事を意識すると共に、此の高次の統一體を地盤とし、之に屬する他の諸集團との對比に於いて所屬集團の獨自性を反省領解するに至り難きは自然である。その結果として、彼等は眞に自他を知る事なくして自己の集團を至上とする種族中心主義 (ethnocentrism) と呼ばれる態度を持つる。而して茲に種族と呼ばれるは多く部族である。彼等は自己のあらゆるものを此の所屬集團に關係づけ、之と關係せるものを何でも讚美し、自己が人類の最も完全なるものであり、その郷國は世界の中心であると考へてゐる。同時に隣接社會の者をも見下し、外來者には誹毀的な稱呼を與へる (Leopold: Postige 一九一三年、三四頁、F. Hertz: Rasse und Kultur 一九一三年、二二頁、Westermann 前掲書、一七一—二二頁)。しかも斯かる外來者への稱呼には人間ならざるものに用ひられる名稱の多い事によつても窺はれる如く、所屬集團とそれ以外の集團と共に人類集團として包括する眞の人類社會の觀念に、彼等は未だ到達してゐないのである。

三

人類が未開の段階から文明の段階に進むと共に、民族の構造も根本的立變化を呈示する。文明と野蠻との兩段階を分つ最も明確な標識の一つは歴史の有無であらうが、歴史が發生して人類が文明の段階に登つたのは、古代の大帝國に於いてであつた。此の事は人間の生活地域が部族の極めて狭小なる郷國を越え難かつた段階から、大帝國が統一せる廣大なる領土に擴大された時に、歴史の發生した事を示すものであるが、此の廣大なる領土の統一は主として征服の連続によつて實現したものであつて、此の征服の結果たる政治的統一體としての國家に於いては、征服民は支配層を形成し、被征服民は被支配層となつた事は當然であり、茲に未開社會には見られなかつた截然たる社會の成層的構造が出現した。而して支配層はあらゆる生産労働を被支配層に轉嫁する事によつて、文化的活動に力を盡くす餘裕を得、此の階層的分業によつて歴史の發生を可能にした文化の躍進的發達となつたのである。而して下層民は奴隸又は之に近い境涯に置かれ、上下の差異は極度に著しかつた。奴隸は未開社會に既に見られるが、これが大規模に現れるのは古代大帝國に於てであつて、人類社會は未開から文明に進むに當つて、

原始時代の極度の階層的等質性の段階から、歴史發端期の極度の階層的異質性の段階に飛躍したのであつた。此の事は此等大帝國の大土木事業の遺跡によつて示される。此等大事業は貨銀を支拂ふを要する自由労働者を使用しては、その費用が余りにも莫大になつて、到底遂行され難きものであるとされる。個々の國について見るも、エジプトは戦争で集められた奴隸階級を有つてゐた。又アツツリアの歴史はそれの刻文によつて、エジプトと類似の社會狀態がその國に存在した事を示す。ヘブライ人も奴隸所有者であり、後には彼等自らもロオマ人によつて奴隸とされた (S. E. Simons: Social Assimilation, American Journal of Sociology 第六卷、一九〇〇—〇一年、七九五頁)。奴隸は物件として所有し使用される人間であるが、人間が物件として扱はれるのは、その人間が眞の人間として感ぜられぬが故であり、斯く感ぜられるのは、奴隸とされるものとその所有者との間の差異が極度に大なる爲、前者が後者の人間觀念から餘りに距たつてゐるによる。斯くの如きは、古代に於ては部族乃至民族の封鎖性が大なる故、夫々の封鎖集團の文化の外に對する特殊性が極めて著しく、諸集團の文化的共通性が發達せざると共に、封鎖によつて人種の混交が妨げられ、文化の

異質性に從つて體質の分化が行はれて、地域の異なるにつれて文化及び體質が共に異なる事著しかつた事、更に異民族間の接觸交渉の乏しい爲、他民族に就いて知る事少なかつた事によるのであつて、斯かる状態にあつては、諸民族を包括する人類社會の觀念が成立する事の不可能なるは明かである。

奴隸は多く被征服民が征服民の郷國に齎された者であつて、被征服民の大部分はその郷國に從前通りの生活を続け、征服民に對して貢税を納める義務を負はされるのが通例であつた。古代國家は多く牧畜民が農耕民を征服した事によつて發生したとされるが、エヂプト、ペロニア等の細密な配慮を必要とする灌漑農業に於いては、勞働の自發性を缺く奴隸は不適當なる爲、奴隸制度は大規模には發達し得ず、從屬的な役割を果したに過ぎなかつた(ウィットフォージェル著、平野義太郎監譯、身體過程にある交那の經濟と社會、上巻、四八八—九〇、四九八—五〇〇頁)。從つて各地の農業は被征服民が從前通り自己の業として之を營むに任せ、その勞働の成果を征服民の役人が收めたのである。徴税の事に當る爲に少數の征服民が各地方の中心地に居住して、支配民の薄い上層を成し、此の上層は全國的に文化上統一を有したが、此の薄い層の下に

は、之と文化的に全く異なる被征服民の厚い下層が存在し、上下兩層は税の徵納以外には何等の交渉もなく、征服民に統合され、その一部となる事は決してあり得ざる遠距離にある人民は、權力を只勝手氣儘に働かせて服仕せしめられ、貢納を強要された(Ciddings: The Principles of Sociology 一九二〇年、三二三頁)のみであつた。從つてまた階層的區別を超えて人が移動出入するが如き事も生じ得なかつた。斯くの如く社會層の封鎖性が嚴重なりし故、兩層の文化的な更に或ひは體質的な異質性は減弱し難かつた。同時に幾度かの征服によつて下層民にされた各地方の諸民族は、夫々征服される以前の地域的封鎖を依然として保持して、相互に異民族として分離交渉の状態を改める事が少なかつた。即ち古代の大帝國は地域的階層的に水平垂直の兩方向に互つて細分區劃され、全國民を包括する文化共同團體は形成されなかつたのである。國家は外部と更に征服の爲の闘争を続ける事によつて、内部の結束融合を進め、又國內の諸被征服民族固有の神々を征服民の神たる國家神に從屬せしめる事等によつて、國民の統一を計つたのであるが(Ciddings前掲書、三二二—三頁)、併しながら宗教は祖國愛までに到らずしてそれ以前の郷土愛に止まつた場合が多く(Witt-

mark 前掲書、一七四頁)、各地の小集團は夫々の祖先乃至は祖先の崇拜した神を崇拜し、斯かる地方神が一つの國家神に融化する程宗教の共同が國民成員間に發達するを見難かつた。此の事は古代の末期に位するマケドニアやロオマに於てさへ、形式的な帝國宗教 (imp. und relig. ion) はその裡にある頗る雜多な宗教的な信仰と共存した事 (E. Barker: National Character and the Factors in Its Formation 一九二七年、一一八—一九頁) によつても察される。ロオマは被征服民にその神々と民風 (Volksart) とを許したが、併し彼等はロオマの國家の神々に供物を捧げ、ロオマの寺廟を建て、皇帝を神として崇めねばならなかつた。皇帝の禮拜を拒むは宗教的な罪ならず政治的な罪とされた (Hekker: Wissen u. Werten d. Nation 七〇頁)。

宗教に於いて認められる右の如き地域的及び階層的なる差異多様性は、他の文化領域にも同様に存立したのであつて、全國土に互る文化共同體の成立した如く見える場合でさへ、實は各地方の都市に居住する征服民及び之と接觸交渉する上層民が、此の國家的共通文化に配與したのみであつた。此の事はヘレニズム文化の普及の如きによつて明らかに觀取されるところである。アレキサン

ダーの遠征の當初は、ギリシヤ民族と諸被征服民族とは反對敵視し合つたが、やがて後者は勢力ある前者の文化に參與する事の利なるを思つて、之に同化すると共に、前者も亦後者によつて影響されて茲にヘレニズム文化の發達となり、人種の融合と共に此の趨勢は益々進んで行つたのであるが、併し斯くてヘレニズム文化の共通になつたのは、上層の教養ある人士のみに限られ、而して斯かる人士の居住するは都市のみであつた (J. Lehner: Hellenen und Barbaren 一九二三年、四四—七頁)。即ち都市以外にあつては、下層被征服民が夫々獨自の傳統的文化を舊の儘に保存して渝らなかつたのである。従つてアレキサンダーによつて築かれたヘレニズムの世界は、文化の地域的並びに階層的區別差異を深く藏せるものであつて、此の世界の住民が一つの文化共同體に融合したものでは決してなかつた。ロオマに於いても事態は同様である。帝國内に融合された分子は餘りにも多數であり餘りにも種々であつて、従つてまた餘りにも文化的に等質性を缺き、單一民族の型に嵌められなかつた。多くの比較的大なる集團は彼等の以前の獨立生活の記憶を保持し、秘密に又公然と彼等自身の慣習と傳統とに従つて生活することを續けた。帝國全土に散在して上層を形成したロ

オマ人は、帝國を包括したが民族を包括したのではなかつた (Joseph 前掲書、一九二九年、一六八頁)。此等古代の末期に見られるが如き社會の地域並びに階層的なる區別と封鎖と分離及び異質性とが、より以前の征服國家にあつては一層著しかつた事は察知するに難くないであらう。従つて各帝國の凝着は構成單位の何等かの内的なる同情によるよりも以上に、外的な統制の紐帶の壓力によるものであつた。此の點で此等大帝國は民族とは根本的に異つてゐた (Joseph 前掲書、一一八頁)。

大帝國の征服民と被征服民とが文化的に融合して一民族を成し難かつたゆみならず、征服民自身さへ單一文化共同體を成し又其屬を意識して協同するに至らなかつた場合が少くない。その明かな例を示すのはギリシアである。ギリシアも亦侵入征服によつて成立した國家であり、膨大なる奴隸層を有してゐたが、その國土は狭小ながらなほ周知の如く小都市國家に分れて居り、各都市國家は夫々自己の守護神と英雄とを有つて相互に對立し、人が自己の都市國家を祖國として之に愛國心を燃え立たしめた物語りは少くない (Wostenmark 前掲書、一七四頁)。而して異なる都市國家の所屬員は、外國の婚姻が法的に認められた稀な場合の外は、決して相互に結婚出来なかつ

た。此の一事を以つてしても、古典時代のギリシア人が民族と呼ばれ得ぬ事は明らかであると論ずる者もあるが (Heitz: Zur Soziologie der Nation und des Nationalbewusstseins 三八頁)、併しこれは主觀的民族概念に立つ見解であり、客觀說の立場よりすれば、宗教その他の文化的差異はあつたけれども、當時の個々の國家はギリシアの民族的聯關を引裂き得ず、アテナイとスパルタさへも眞の獨立なる民族に分たれはしなかつたと言はれる (O'Spinn: Geistesgeschichte 一九一三年、四七〇頁)。けれども斯くの如き事が特に言はれる事自體が、ギリシアの民族的統一の不完全であつた事を物語るものに外ならない。とは言へ全ギリシアに通ずる文化の發達は大であり、従つてギリシア人は不斷の内部の鬭争にも拘らず、あらゆる外人に對する優越の感情を共通にし、ヘラスなる共通の稱呼によつて表意された連帶の感じを有してゐたのみならず、彼等が全體としてギリシア民族の爲に進んで戦はんとする意向を有する事も認知される。而してこれは自然の事ながら外敵の脅威のありし時に一層明白になるのであつた (Joseph 前掲書、一六六―一七頁)。たゞ彼等の主觀的共屬は十分發達するに至らず、むしろ都市國家への所屬意識の方がより強かつた事が、遂にギリシア民族を

没落に導いたのであつた。ペルシア戦役に於けるギリシア人の一致結束も、テミストクレスの如き時流を超越せる達識の士が、權謀術數とまで見られるあらゆる手段を盡くして、諸都市國家の團結の爲に奔走せる結果の賜物として漸く實現せるものであつて、彼の如き卓抜なる偉人が存在しなかつたならば、ギリシア民族は後にマケドニアによつて蒙らしめられた運命を、ギリシア文化の開花に先立つて經驗したであらう事の蓋然性がないではなかつた。

ギリシア人が民族的結束協力の故に没落したのは、彼等が未だ他民族を自己と對等のものとして認めるに至らず、他民族を總て蠻民として蔑視してゐた事によるところが多い。彼等は自民族と共に之と對等なるものとしての諸他の民族を併せ包括する人類社會の觀念に未だ到達せず、故にまた他民族との鬭争を経験しつゝもこれが眞の否定となつて民族の自覺を有つに至らなかつたのである。他方古くからギリシアと東方諸國との間には活潑なる商業關係があつたにも拘らず、ギリシアがその急激に勃興を遂げた時代までは、此等の國土と人民とに就いてギリシア人の知識は皮相なものに過ぎなかつた。これは紀元前七世紀頃にも東方の諸國は殆んど完全に封鎖され

てゐて、商業關係も個々の海岸都市に限られ、内部まで入り込むことは出来なかつたと言ふ事情による。後に至つて漸く困難な旅行をなし又稀には長く滞在して、此等異國の文化を詳細に學ぶ者も現れるに至つた。ピュタゴラス、ヘロドトス、デモケデース、テミストクレスの如きが、斯かる人々である (Jelinek 前掲書、一一頁)。けれどもその頃は既にギリシアは文化的及び政治的發展の頂點に近く、従つて他民族に對して優越を感じる儘に、以前と同様之を蔑視するの風を脱しなかつたのである (Jelinek 前掲書、一〇一頁)。但し外來者、その中わけても諸民族を巡り來つた者は、斯くの如き態度は執らなかつた。その代表的なる者はソフィストであつて、彼等は諸民族に通ずる一般者に注目して自然法の觀念に到達し、之に基づいて當時まで全く現れた事のなかつた萬人自由平等の説を唱へた。併しながら此の革命的な見解は即自的な民族意識を脱しなかつたギリシア人には何等作用することなく、ソフィスト以外には殆んど及ばなかつた事は注目に値ひする (君同書、一七一―一八頁)。キクロヤその他の著作家によれば、ソクラテースは何處から來たかとの問ひに對し、自分は世界公民であると答へたとの事であるが、此の逸話は全く信憑すべからざるものである。

斯くの如き問ひがアテナイに於いて外來者には發せられたとしても、ソクラテースに發せられる筈がなく、又プラトンの對話篇中のソクラテースの言葉に對しても、彼の所謂世界公民主義は調和したる (E. Zeller: Die Philosophie der Griechen 第二部第一篇、一六八十七頁、註五)。プラトンはギリシア人も少し前には蠻夷が一般に抱いてゐると同様の觀念や考へを持つてゐた事を認め (The Dialogues of Plato, B. Jowett 英譯、第三卷、The Republic 一四四頁、右同、第一卷、Cratylus 三三九頁)、ギリシア人と異民族とは元來根本的に相異なるものならざる事を示唆し、更に進んで外來者の言葉として、ギリシア人と蠻夷とに分つ當時ギリシアに支配的な二分法が誤りであり、ギリシア人は人類の極めて小なる一部に過ぎず、蠻夷なる單一名稱を以て呼ばれるものは、人類の大部分を占め、その中に無数の異なる種族の存する事を述べて (右同書、第四卷、Symposium 四五七—八頁)、人類社會の理念の萌芽を見せてゐるが、併し斯くの如きは全く萌芽であり灰色の理論たるに止まつてゐて、プラトーンも實際的にはギリシア人を非ギリシア人に對して絶對的な優位にあるものとしてゐた事は、此の哲人が奴隸制度を容認してゐた事によつても明らかである。アリストテレスは更に

一層保守的であつて、ソフィストの平等論を力強く排撃し、エウリピデスのギリシア人が非ギリシア人を支配するは正常であるとの句を引用して、これは後者が本性上奴隸たるべき人間であり、前者は生れながらにして支配者たるべき人間であるといふ區別があるからであると主張してゐる (Aristoteles: Politic, Rolfes 獨譯、Phil. Bihl. 二一三、八頁以下)。但し北方諸民族は自由民と見做されたが、これは、此等の民族はギリシア人と人種及び文化の系統を同じくすると共に、ギリシア人との接觸交渉多く、従つてギリシア人と同様の人間性を有する事が理解されてゐた事情によるであらう。

ギリシアの哲人さへ到達しなかつた人類社會の理念に、より以前の諸民族が到達しなかつたのは餘りにも當然の事であつて、古代の諸大帝國に於いて支配權を握つた夫々の民族は、等しく自己のみを眞の人間と觀じ、その占居する地域を世界の中心と信じたのであつた。此の事はエジプト、バビロニア、アッシリア、ヘブライ、ペルシア等の何れに於いても認められる (Westermark 前掲書、一七三—四頁)。斯くの如き段階に於ては、民族の闘争も眞の民族的自覺を生ぜしめ得べき地盤が缺如するが故に、自民族中心的即自態に對する否定とならなかつたのは當然の事である。然るにロオマに至つて新たな段階が展

示された。ロオマ人は相次ぐ外部との闘争によつて内部の初期の部族的分立を克服した點に於て、ギリシアと異なるのみならず、文化上自己に對して先進的地位にあるギリシアと交渉する事深く、その優越性を早くから認知してゐたが故に、非ロオマ人を直ちに劣等視する態度も抑制されると共に、異民族を自民族と並位の人間集團として扱ふ態度もまた自ら養はれた。ロオマの版圖に屬する各地方の被征服民は何れも傳統的特殊文化を維持してゐたが、政治的統一と文化の發達によつて、人は簡單に又容易に自己の欲する所に赴くことが出来た程、帝國内の人及び物の移動が發達したので、ロオマの文化が或度まで全國に普及すると共に、諸民族間の相互理解も進んで來た。茲に於いて血統により又民族による差別なしに全人類を結合する心術が、ロオマに於て初めて完璧姿を現し、他民族も自民族も對等なるものとして認知され、諸民族を包括する高次の統一體としての人類社會の觀念が樹立され一般化したのであつた。ギリシアのソフィストによつて創められた此の理念は、ロオマのストア派によつて更に深められ一般化されたが、同時に此の新たる社會に對する名稱が創造され、これが今日まで保たれて來た。これ即ち *humanitas* である (Julianer 前掲書、六六

一七頁)。

但し當時人類社會の内に包容されたのは、ロオマ文化が普及し文化的共通性と相互の理解との或度まで進んだロオマ帝國の内部の諸民族に過ぎず、此の地域が *Oedipatio* 即ち人間の居住する土地と呼ばれた反面に於て、これ以外の地域の人間は依然として蠻夷即ち眞の意味の人ならぬものと見做されたのであつた。既に人間性を認めるに至つたものを物件として扱ふ事は矛盾である。故に此の頃に至り奴隸制度に關し思想及び法律の領域に於て著しい變化が生じたが、ストア派の人々が此の變化に與つて力あつた事は當然である。例へばセネカは奴隸制度に關して自由主義的な感情を表明し、貧しき友として之を扱ふべしと言ひ、トラヤヌス帝の顧問ディオ・クリソストムスは奴隸制度の原理は自然法に反すと聲明した (N. Ingram: A History of Slavery and Serfdom 一八九五年、五九一—六一頁、W. G. Sumner: Folkways 一九〇六年、二八七頁)。けれども、文化的及び人種的差異の大なるが故に眞の人間と認められ難かつた蠻夷を奴隸とする事は、何等矛盾とは感ぜられず、従つて斯かる蠻夷を以てする奴隸制度は存続すべきであつたが、恰も此の頃ロオマの外征はその局限に達し、蠻夷の征服され捕へられるもの

四

が減少した爲に、奴隸制度は次第に衰頹し、従つて階層間の距離が接近するに至つた(右同書、七六一頁)。他方人類社會の理念を樹立して民族自覺の地盤を形成したストア派は、あらゆる人間に共通なる理性を尊重し、此の理性を有する人間を世界公民となすと共に、此の超民族的なる立場に赴くに急なる餘り民族の立場を飛び越え、世界公民にとつては民族は無意義なものであるとした。併しながら漸くにして諸民族が相互に人間性を認め合ひ初めるまでに接近したに過ぎない當時にあつては、民族性の差異は猶極めて著しく、萬民に共通なる行爲様式は未だ頗る乏しかつた。故に普遍的理性に従つて行爲する賢者を中心とする世界國家は、空虚にして現實から疎隔せる觀念に過ぎなかつた。此の點に於てストア派は民族を排撃しつつも、民族的紐帯に代り得る現實的な社會原理を提供し得ず、現實社會を動かす力たり得なかつたのは當然である (Jahner 前掲書、九〇—一頁)。

以上の如く古代は、廣大なる地域の政治的統一と極度の差異を含む階層の成立とに初まり、末期に至つて、此の地域内の諸民族が同一人類社會に屬すると觀ぜられるまでに接近すると共に、上下兩層も一が他に人間性を認めるまでに接近するに到つたのであつた。

西洋中世の主要社會制度は封建制度であるが、此の制度は、國家の統制力が衰頹して社會が混亂に陥り、各地の領主が土地人民を私し、武力によつて分立對抗せるところに發達したものである。而して不斷に抗争の關係にあつた領主等が、その領地を封鎖し領内の自給自足を計つたのは當然であり、従つて社會は地域的に區劃され、各地の文化は必然的に分化し、その特殊性を増大せしめるの一路を辿つた。斯かる地域的區劃分立は、例へば通常此の事なしと考へられてゐる宗教の領域に於ても見出され、ロオマ教會は中世期に於いては未だその普遍的優位を確立せず、歐洲大陸には地方教會 (territorial church, Landkirche) の名を以て呼ばれる教會があつて、法王からの大なる獨立を確保し、夫々の地方の領主と密接に結合して活動し得たのであつた (Jahner 前掲書、一八二頁)。他方社會層間の分業が確立し、政治・軍事・宗教等を上層を構成する領主及び武士乃至騎士と僧侶とが獨占すると共に、彼等は下層民に對する自己の威光を確立して、之に基づく支配を絶對化する爲に、各層特有の行爲様式を規定して上下の差別を強化し、又上下の接近を防ぐ爲に上下の接觸を制限せん事に務めた。その結果社

會層は各層間に人員の出入移動なき封鎖性を特質とする身分層を成した。斯く上層が下層から能ふ限り離隔せんとせる努力の一つの表現は身分内婚姻の原理であつて、此の原理の遵守の結果、上層民と下層民とは血統を異にするといふ事が殆んど自明の如く思はれてゐた。此の身分層による「生れ」の差異の觀念は敬稱にまで表はれて、上層のものには *hochgeboren* 更には *hochwohlgeboren* 等の言葉が用ひられるに至つた (*Herz: Wessen u. Werden u. Nithon* 四〇一頁、註)。斯かる言葉によつても窺はれる如き格段の優位にあつた上層民は、常に下層民を蔑視する態度を持したが、下層民は之に對して盲目的に服従を捧げ、兩者の間には前者による後者の搾取以外には何等の交渉もなかつた事、古代國家に於ける上層征服民と下層被征服民との間の關係に近いものがあつた。斯くの如く隔絶せる上下兩層間の文化的差異が、異民族間のそれに近い程大になり、又兩層間に何等共屬の意識及び意欲の生ぜざる事も、異民族間に於けるに近かつた事は極めて當然であると言はなければならぬ。

下層民の大部を占めた農民が農奴なる半自由民であつた事は、彼等と上層民との關係をして、全き不自由民たる奴隷と上層民との關係が本來全き異民族の關係否人類

と非人類との關係なりしに比して、遙かに距離の小なるものたらしめた事は認められなければならない。此點に於いて古代と中世との階層關係に根本的な相異がある。

とは言へ農奴は猶完全き自由民とも根本的に相異してゐた。彼等は賦役貢租を課せられたのみならず、所謂土地付きの人間として地域的移轉の自由を奪はれ、土地への繫縛 (*Schollen-gebundenheit*) は農奴の基本的特質の一であつた。元來農民は農業そのものの特質よりして自己の居住民から離れ難く、定住性が大きくあり、此の事は早期の農村が多く氏族集團乃至同族部落であつた事によつても示される。中世の後半に於ては、人間の移動混合も或度まで進み、村落は血縁集團から地縁集團に移行したが、氏族體制の影響は中世の末まで殘存した所もあるのみならず、例へばドイツでは宗教改革の頃まで、生と死・結婚と相續・祝ひと争ひ等が本質的に氏族に屬する事柄であつた所もあり、仇討ち等の之に屬してゐた所もある (*A. Bartsch: Der Bauer in der deutschen Vergangenheit* 1900年、八、五二頁)。村落は多く牧地森林等を共有し、此等の土地の利用収益の故にも村民は離村し難かつた。しかも交通機關が未發達であり、田舎と都市との關係は中世の頂點に於いても大なる意義を有するに至らず、從

つて各村落は經濟的に自給自足を原則としたのみならず、裁判の如きに至るまで、村内で之を處理した。斯くして中世の村落は一の封鎖世界 (eine abgeschlossene Welt) であり、一の獨存世界 (eine Welt für sich) であつた (右同書、七四、七六頁)。當時の村落が如何に外界との接觸に乏しかつたかは、村人は村以外の廣い變つた出來事を知る機会がないので、村人が村の往來を通る旅人を誰でも「待ち伏せ」してゐて「報道」(Zeitungs) を求めるのを常としたと言ふことによつても知られるであらう (右同書、七四頁)。此の著しい地域的孤立 (territoriale Isolierung) によつて、村落内の文化的等質性は増進すると共に、外界に對する文化的特殊性は高昇して行つた事は、改めて言ふを要せざるところであり、各々の村落は高度に發達せる文化共同體を成すと共に、諸々の村落に共通なる文化は乏しく、農民を包括する文化共同體の發達し難かつた事は自然である。

中世都市も亦大なる封鎖性を有してゐた。市民を Bürger, bourgeois と稱するは、市民が城壁に據つて戰鬥の擾亂から自己を閉じ守つたところから都市が發達した事情による。而して都市と都市とを結ぶ道路も亦甚だ不備であり、且匪賊横行して遠路の往復は極めて危険であ

つて、都市にも規則的で安全な外部からの物品の輸入は考へられぬところであり、都市も需要は自給するの態度を執らざるを得なかつたが故に、都市に於いても外界との交渉を主とする商業は全く從屬的な位置を與へられてゐた。この事は都市住民にして直接生産業に従事せる者八〇パーセント、純粹の商人は五パーセントなどと傳へられる事によつても明かである。都市は自給自足を能ふ限り多方面に貫く爲に、必需品の製造の缺如せる場合には、都市自ら種々の補助をなしてその製造者を來往せしめるを常としたのであつた (K. Bücher: Die Entstehung der Volkswirtschaft 第一卷、一九二三年、一二三頁)。従つて都市は僅かにその周圍との交渉を行ふに止まる所謂「都市經濟」を成立せしめたに過ぎず、政治的にも自主自治の體制を執つて、外界からの介入を容れなかつた。斯くて市民も亦高度に定住的であつて、市民となる爲には家屋敷を持つ事を必要とした事も、市民の地域的移動の少なかつた事を物語るものである。この事はやがて都市に於ける職業を初め一切の行爲様式を父祖以來の傳統的なるものたらしめ、斯かる傳來の行爲様式はまた自ら外に對して大なる特殊性を有するに至ると共に、内に於いてはあらゆる市民に共通となつて、市民相互の間に大

なる文化上の等質性の存在した事も當然である。従つてまた諸都市間には共通性が乏しく、各都市は排他的であつて、都市内の組合が特權を擁して夫々の業務を獨占し、外來者は數々の制限の下に置かれてゐた。

以上の如くにして根元的な分化即ち文化的分立主義 (Kultureller Partikularismus) と云ふ基本的特質が中世を性格づけてゐる。法制資料は如何に統一的なゲルマン法から地方的に種類を異にする法が一面益々成長して行つたかを示す。言語も同様に無數の別々な方言に分れてゐた。生活上の習慣は殆んど庄園から庄園へ又谷から谷へと異なつてゐた (O. Bauer: Die Nationalitäten und die Sozialdemokratie 一九二四年、四二頁)。

下層庶民が右の如く地域的に分離して文化的分化を高めて行つたに對し、上層民には逆に文化的共通性が增大して行つた。即ち時と共に交通通信の技術機關が發達し、社會的不安擾亂が減少するにつれて、地域的移動に必要な物質的基礎と閑暇とを有する上層民は、社交・祝祭・會議その他の爲に、從來の地域的封鎖性を破つて相互に接觸交渉する機會を有ち初めた。斯くして歐州中世の後半には、上層民に共通な騎士道や騎士の歌謡等が成立發達した。又特に宗教の共通性によつて言語教育その他一

般教育も廣汎な地域に亘つて共通性を獲得した。ラテン語は西歐諸民族の上層を一つの文化共同體に合併せんとする傾向を示した。中世の學校としては僧院學校があり、次に十世紀以來特に重要性を増して來た僧正管區の學校及び本山附屬の學校最後に之と略、同じ頃現れた都市の牧師學校等があるが、此等總ての學校に共通なるは此等が何れも國家生活に無關係で、之に何等の理解もなく對立し國家の地域的限定さへ超越してゐた事である。ドイツに於いてもフランス、イギリスに於いても、教材は總て同一で、差異は只教へられる事柄が或所では少し洗練され他の所では稍、粗野に扱はれるといふ事に過ぎず、何れも共通の資料から精神及び情緒の糧を汲みとつたのであつた。即ち皆ロオマの提供するものを受取つたのである (W. Mißbach: Nationalismus, Geschichte einer Ideologie 一九二九年、八四―五頁)。大學の如きも亦同様に單一の教授法が守られ、單一の僧職者制を採つてゐた。而してオックスフォード、パリイ、ブラウグ等に亘つて單一の言語が支配した。又教會が他の領域と同様なるは勿論であつて、各地の教會が相寄つて國際社會をなしてゐた。法王權の伸張と共に普遍的教會が地方教會に對して勝利を占め、前者の教會法は英國まで包括する廣汎なる

地域に互り、婚姻を統制し、財産の處分に影響を與へ、或範圍に於いて人倫の一定規準を擁護した (Banker 前掲書、一八三頁)。

以上略述した如く、中世歐洲は地域別及び階層別に、水平垂直の兩方面に區劃されてゐたが故に、民族的文化共同體は未だ成立し難かつた。農民はその狹隘なる村落地域内に封鎖されると共に、彼等によつて養はれる上層民に於て實を結んだ文化には何等關與するところもなかつた。此の故に彼等は民族の小作人 (Hinterlassen der Nation) と呼ばれる (Bauer 前掲書、五〇頁)。市民も亦その都市を生活空間として、農民から離れると共に、上層民に對抗して之と共通なるものを有たなかつた。やがて上層民に非通なる文化が發達したとはいへ、それは餘りに廣汎なる地域に跨つたと共に、主として精神文化に限られてゐたが故に、單一民族文化共同體を成立せしめ難かつた。猶又民族の發展は廣きに過ぎる神聖ローマ帝國の存在によつても阻害された。これは民族的文化の發達を弱める傾向をとつた。更にローマ舊教教會の存在も同様であつた (Joseph 前掲書、一六九頁)。諸領主の聯合や諸都市の同盟が生じて、それ等の地域は後に生じた民族の地域と合致せるものではなく、或ひは民族的なる

その一部に止まり、又は幾つかのそれに跨つてゐた。斯くて種々の文化共同體が成立しつゝも、或ひは餘りに廣く、或ひは餘りに狭く、その上又何れもその占居する地域の人間の一部の階層を包括するのみであり、且民族的文化共同體の名に値ひする程一切の文化領域の特殊性を内容として有するものではなかつた。従つて共屬の意識及び意欲も、斯くの如き雜多にして不完全なる文化共同體の夫々を基礎として、頗る不明確に現れる以上には出難かつたのであつた。

即ち農民の共同體感情は一村の成員に及ぶのみであり、市民にとつては自己の都市が郷土であると共に祖國であつた (Mischlich 前掲書、七二、七四頁)。例へばケルン市の市民はその都市を我が愛する祖國と呼んだ (右同書、七四頁)。騎士の第一の義務は領主への忠誠であつて、眞の愛國心は騎士道の寶典には全く存在の場所がなかつた (Wesemack 前掲書、一八〇頁)。領主はまた自己の領土の利を計るに専らであつた。僧侶は結婚の抑制を次第に強化される事によつて家族と民族とから解き離されて、次第に彼等のローマへの結合が強まつて行つた (Mischlich 前掲書、一〇二頁)。他方民族的共屬の意識及び意欲はその基礎を缺き、民族の統一と誇りと感情は中世の

末まで積極的な力としては感ぜられなかつた (Joseph 前掲書、一七〇頁)。斯くの如き状態にあつた中世に後世から見て反祖國的反民族的となさるべき行爲の多かつた事も、何等怪しむに足りないであらう。斯かる例は枚擧するに暇ない程である。その一二を挙げれば、オルレアン侯はランカスター侯と攻守同盟を結び、同様にイギリスの商人はイギリスと交戦中諸國民にイギリスの市場で購入した糧食とイギリス人の製作した武器とを供給するを常とした。又ドイツの年代記記者や詩人が、ドイツのルードルフ侯にスラヴ・チエツコのオットカール侯が敗れた事を深く嘆き、イタリヤに幾度かドイツの皇帝の侵入せるに對して、民族的なる反抗は一度もなく、却つてイタリヤ人は時々ドイツ皇帝の來り治めん事を希ひ求めた。此の事は民族的文化共同體がその名に値する内容を有つて成立してゐなかつたといふ實狀によるのであつて、中世に於いては民族の領域には完き混屯と不明確性が支配してゐて、民族と稱し得べき安定にして明確なる集團は存在しなかつたのである (Mischke 前掲書、一六九頁)。最初からドイツ、イギリス、スペイン、フランスその他の民族があつたのでなく、成立し來つたものを後から斯く呼んだのである事を人は忘れてはならない。(下

民族發達の諸段階

イツなる語も元來言語を呼ぶ言であつたに過ぎない。當時フランク人がチエツコ人アラビヤ人その他に對して自己をゲルマン人と感じ、從つて又自己の民族性によつて此等のものから自己を別のものとなしてゐたか否かは疑はしく、恐らく彼等はキリスト教徒と異教徒とを最も情熱的又意識的に區別したであらうと言はれる (V. Meynert: Kulturgeschichte der Neuzeit 第二卷、第二部、七三七頁)。これ中世には「ドイツ民族の神聖ロオマ帝國」といふが如き言葉の用ひられたかつた (Horitz: Wesen u. Werden d. Nation 四頁) 所以である。當時歐洲に統一の觀念が少しでもあつたとすれば、それは統一的なキリスト教社會のそれであつたが、併し此の社會はむしろ人類社會に近く、民族と見られるには余りに廣大であるのみならず、その基底をなす文化共同體の内容も亦一部領域に止まる不十分なものであつた。他方民族の祖國たるべく餘りに狭い地方的文化圏が發達してゐた。ドイツ語の *Stamm* は部屬乃至種族の如き血縁集團を意味すると共に、慣習・方言・信仰等々で内部が統一性を有すると同時に、他から或度の色合の違ひによつて區別される文化的統一體をも意味し (A. Vierkandt: Familie, Volk und Staat 一九三六年、三七頁)、その地域は民族の地域を區劃せる廣

さを有するが故に、地方的文化圏と稱すべく、諸侯の領地が斯かる文化圏を成したの自然の事である。都市及び村落が民族に近い文化共同體と共屬の意識とを備へた場合も多く、従つて此等の集團に民族 (Nation) なる言葉が往々にして用ひられた。例へばイタリアでは中世後期にも *natione sensu, natione florentina* 等と言ひ、これにシエナ市やフィレンツェ市の住民を意味した (*Miscellaneous* 前掲書、七四頁)。更には貴族層の如きさへ、右の「民族」なる言葉を用ひんとするが如き場合のあつたのも (右同書、四〇頁) 彼等が下屬民に對して特殊な文化共同體を成し、又これを基底として彼等のみの共屬の意識及び意欲を有してゐたことを思へば、故なき事とはされないであらう。斯くの如く中世には諸々の地域的階層的なる擬似民族乃至不完全なる民族が多數存在し、本來の民族は謂はゞその構成要素を此等民族類似體に分割されてゐたが故に、明確なる姿をとつて現れ得なかつたのである。併しながら國家の統一に向つての努力、交通の發達、地理的因素の規定等によつて、次第にキリスト教世界よりも狭く、地方的文化圏よりも廣い地域に、上層民を中心として特殊な共同文化が成立すると共に、上位者を下位者が模倣する社會心理作用によつて、上層の行爲

様式が徐々に下層に及び、地域的及び階層的なる民族への障礙が減少して、幾多の民族的文化共同體の基礎が漸次築かれ初めた。同時にまた此等の文化共同體の成員は、或ひは此の共同體の地域の外に出て他の文化に接し、又は共同の敵を持つ事によつて所屬文化共同體を反省し、之を基礎とする民族的共屬を意識し意欲する機會を有するに至つた。斯くて中世の末期に至り近代民族の萌芽が形成されるに至つたのである。十字軍の如きは、生成の過程にあつた諸民族が接觸し對立する機會を興へた著しい場合の一つであり、アラビヤ人との戰爭や英佛の抗爭の如きも亦之に屬する。此等の機會によつて感ぜられ初めた民族意識は、ワルター・フオン・デル・フォーゲルワイデヤローランの歌等に表された祖國愛の言葉に於て十分に觀取されるところである。(未完)